

て動的治療を開始した。

(症例2) 初診時年齢40歳3ヵ月、男性。上顎左側中切歯が欠損していることを主訴に来院した。上顎の欠損部には1本義歯を装着していた。また、右側中切歯に捻転が見られた。下顎前歯にわずかな叢生が認められるが、大臼歯部の咬合関係はAngle I級で上下顎の咬合関係は良好であった。セファロ分析では、ANB+3.2°で上下顎の前後的位置に問題はなかった。

(診断) 上顎左側中切歯欠損を伴う叢生症例

(治療方針) 上顎左側中切歯を中切歯に、犬歯を側切歯に、第一小臼歯を犬歯に代用することにした。審美性および最終的な咬合関係の面からは多少の問題があるが歯を削合したくないとの患者の希望があったため矯正治療のみでの実施を試みた。

(考察および結論) 上顎左右犬歯が口蓋側に埋伏している症例と上顎左側中切歯が欠損した症例を経験し患者側も満足する良好な結果が得られたが、矯正治療終了にあたっては、治療が長期になったことなどから、空隙に対する処置としてはインプラントなども併用したほうが治療期間、患者のストレスなどを軽減できるため選択枝のひとつとして説明する必要がある。

19) 空隙の獲得と矯正治療

○荻野 久

(おぎの歯科・矯正歯科クリニック)

(目的) 矯正治療では歯列配列を考える場合、空隙の有無により治療方針が異なる。したがって、空隙の獲得は治療期間、治療装置、治療費にも影響を与えるため診断、治療方針立案にあたり重要である。そこで、矯正治療と空隙の関係について検討したので報告する。

(対象および資料) 対象は、当院に来院した叢生を主訴とする矯正患者74名のうちANBが3.4±3.6°の上下左右第一小臼歯を抜歯した抜歯群12名と空隙獲得の処置をした非抜歯群11名の女性を無作為に抽出した。抜歯群は平均年齢18歳9ヵ月、Discrepancy上顎11mm、下顎9.8mm、ANB3.4°非抜歯群は平均年齢14歳8ヵ月、Discrepancy上顎9.8mm、下顎5.3mm、ANB3.4°であった。資料は、動的治療開始時および終了時の口腔内模型、セ

ファロ、パノラマX線写真とした。

(方法) 口腔内模型およびパノラマX線写真は、歯列形態、歯の配列状態、咬合状態などを診査した。模型計測は、Tweedの方法に準じてDiscrepancyを計測した。セファロは、動的治療開始時と終了時についてFrankfort平面とS-N平面を基準に角度と距離を計測した。また、S原点、Frankfort平面を基準に座標値を求めた。さらに、計測値をStat-viewにて統計処理して比較検討した。

(結果) 抜歯群と非抜歯群を比較した場合、初診時年齢は非抜歯群が低かった。Discrepancyは抜歯群と非抜歯群に大きな差は見られなかった。動的治療開始時と終了時の計測結果では抜歯群の上下顎前歯と上下唇の後退が認められ、非抜歯群では、上下顎前歯の唇側傾斜と上下唇の前突傾向が認められた。

(考察および結論) 初診時年齢は、非抜歯群が低く保護者の歯列不正への関心度の高さがうかがえたが、実際に抜歯、非抜歯を決定する際には患者の希望も考慮されるため10mm前後のDiscrepancyがあっても非抜歯で治療することが多い。しかし、今回の結果から抜歯群は、上下顎前歯の後退と下顎の回転により側貌改善が良好であったが、非抜歯群では良好な側貌改善が認められなかった。したがって、11mm以上のDiscrepancyがある場合は空隙確保のため抜歯をするべきである。また、最近では難易度の高い患者も多いため治療期間などを考慮して他の治療方法を取り入れることも検討する必要がある。

20) 会津中央病院歯科口腔外科開設後の顎関節症に関する臨床統計的検討

○馬庭 暁人、宮島 久、強口 敦子
海老原寛子、大友 友昭、平野 千鶴
小澤 幸恵、古田 撰夫、大溝 裕史

(会津中央病院歯科口腔外科)

会津中央病院歯科口腔外科が平成12年4月に開設されて以来、口腔外科的疾患は増加傾向を示しており、その中でも顎関節疾患の占める割合は比較的多い。そこで演者らは第15回日本顎関節学会総会において、当科における顎関節疾患の傾向を

調査検討し、その概要を報告した。今回は、顎関節疾患のうち、その大部分を占める顎関節症に関して、当科の実情を知る目的に臨床統計的検討を行ったので、その概要を報告した。

対象は、平成12年4月から平成14年3月までの2年間に会津中央病院歯科口腔外科を受診した再来初診を含む初診患者3477名のうち、顎関節症と診断された242名中、資料の整っている217例とした。年齢別・性別患者分布では20歳代が最も多く、性別では、男性67例、女性150例で、男女比は1：2.24であった。主訴別頻度として疼痛を主訴に来科する症例は約半数を占めていた。病悩期間では1ヶ月から1年以内が35%と最も多く、次いで1

年以上が26%、1週間から1ヶ月以内が16%であった。病悩期間が長期になるに従い、顎関節痛の比率は減少し、関節雑音が増える傾向があった。来院経路別頻度は当科来科以前にいずれかの病院または診療所を経由し受診したものは48%と半数近くを占めていた。症状別頻度では、いわゆる顎関節症の3大症状が多くを占めていた。症型別頻度では、顎関節内障が半数以上を占めていた。治療法では、化学療法、理学療法、スプリント療法、徒手整位術、パンピングマニピュレーション、簡易精神療法、咬合治療を用い、その中で主たるものはスプリント療法であった。